

平和を求めて
―被害者と加害者とわたしたち―

奨励	原 誠〔はら・まこと〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授
研究テーマ	日本とアジアのプロテスタント教会の歴史

現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないといわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、`霊、の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

（ローマの信徒への手紙 8章18―25節）

クリスマス等待つ

蠟燭に2本、灯がつけました。今週は、アドベントと言い、クリスマスを迎える準備の2週目に入りました。キリスト教の暦の考え方では、クリスマスを待ち望むという意味のアドベント、待降節のはじまりが、新年となります。キリスト教でなぜクリスマスを祝うのかと言うと、神が私たちの歴史にひとり子イエス・キリストをこの世界を救うために送ったからなのです。もう少し別の言い方をすれば、神が私たち人間の歴史に、私たちの世界に、私たちの社会に、この現実を救うために介入してきたということです。人間のさまざまな欲望が支配する世界ではなく、神が人間に何を期待しているかということに思いを広げ、考えるときです。神の意志を伝えるために、イエス・キリストは、誕生したのです。

戦争が始まった

学生の皆さん方、ご存じでしょうか。明日12月8日は、アジア太平洋戦争開戦、真珠湾攻撃から70年です。真珠湾攻撃は有名ですが、実は、岩波書店発行の『近代日本総年表』によりますと、1941年12月8日には、3つの戦闘があったことが記されています。最初は、真珠湾ではないのです。午前2時に日本軍はマレー半島のタイのシンガラ、パタニというところに上陸をします。実は、私の亡くなった父はこれに動員されておりました。それから1時間19分後、ハワイの真珠湾攻撃が始まったのです。そして同じ日、台湾から飛び立った日本軍の飛行機がフィリピンを攻撃しました。

真珠湾攻撃から、日本が敗戦に至り、70年経った今、私たち日本のありよう、言うまでもなく、現在原子力について直接向き合っていかなければならない私たちの社会、何をどのように考えたらよいのだろうかということをお話していきたいと思います。

今日、テーマを「平和を求めて―被害者と加害者とわたしたち―」としました。平和を求めているという言い方は普遍的で一般的な命題です。誰しもが、それを言います。しかし、古今東西、誰い方をすれば、平和を求めて各国で戦争が行われています。平和を求めてという理由で、開戦を表明しています。歴史解釈やさまざまな立場での意見もありうると思います。アドベントのひとつき、戦争において、誰が被害者で誰が加害者なのか、70年前の歴史も含めて思いを傾けてみたいと思います。

丸木位里・俊夫妻のこと

私は17年前に同志社にまいりましたが、それ以前は群馬県にあります新島学園短期大学で働いていました。そのとき、毎年、学生と一緒に埼玉県東松山市にある丸木美術館を訪ねていました。日本画家の丸木位里、俊夫妻、このお二人がずっと描き続けていた絵を収集している美術館です。

油絵のようにさまざまな色彩を使つての絵ではなく、彼らの絵は、日本画の水墨画でありました。漆黒になるときもあれば、薄い灰色になることもあるわけですが、同時に彼らは濃淡のある黒のほか、赤を用いた絵を描きました。赤は火の色です。「原爆の図」という有名な絵の連作をご存じでしょうか。1945年8月6日、原爆投下直後、家族を探しに、夫の丸木位里さんは広島市内に入り、その悲惨さを目のあたりにしました。そのことを夫妻は、絵にしていっただけです。最初に、戦争が終わって5年後の1950年、「幽霊」という絵を描きました。壁面のように大きな絵です。その後「火」、「水」、「虹」、「少年少女」、「原子野」、「竹やぶ」、「焼津」、「署名」、「母子像」、「とうろう流し」、「米兵捕虜の死」、「からす」と続き、最後の1982年、「長崎」という絵まで、全部で15の連作として結実しました。言うまでもなく、一般市民の上に無警告に原爆を落としたことによって生まれた「地獄」を描いたものでありました。彼らの絵にもあるように、米軍の捕虜も当時、広島に居住していました。また、日本に強制連行されて広島市に住んでいた朝鮮・韓国の人びとの上にも原爆が落ちたのです。日本人だけに向けられた攻撃ではなかったという事実も覚えたいと思います。

彼らは1970年に、これらの絵を携えてアメリカに渡り、アメリカで巡回しながら、絵の展示を行いました。どういう反応があったのでしょうか。アメリカでの反応は明確に三つに分けられました。①戦争を早く終わらせるために原爆投下は正しい方法であった、②悲惨さを目のあたりにして、とんでもない爆弾を落としたと率直に謝罪する、③広島に原爆を落としたことについて、あなたたちは、アメリカを批判するけれども、日本も中国で非戦闘員の一般市民を大量に殺したではないか（主に南京大虐殺のことを指して）というものです。

南京大虐殺のことは、日本では報道管制がしかれていたので、一般市民はそのことを知らされていませんでした。丸木位里、俊夫妻は、当時、平均的な日本人として南京でどういったことが起こったのかについては知らされていなかったということです。アメリカに行つて、初めてそういうことがあったのかとショックを受けます。アメリカで指摘された丸木夫妻は、帰国後、戦時下の日本の歴史を学びはじめ、心の目が開かれていきます。それが、1975年の「南京大虐殺の図」です。1977年の「アウシュビッツの図」、1980年の「水俣の図」、熊本県水俣市の工場から出る排水の水の中で生きていた魚を食べて、それが食物連鎖で生物、人間に非常に大きな影響を与えた水俣病は日本の公害病です。その後1983年には「おきなわの図」が連作として完成します。「おきなわの図」は、翌年1984年の「沖縄戦の図」も含めて現在、沖縄の宜野湾市にあります佐喜眞美術館に常設されています。私は学生と沖縄にいくときにも、必ずここを訪れます。絵を描くときのモデルになった人たちは、沖縄のクリスチャンたちです。沖縄県佐敷町（現在の南城市佐敷）にあります日本キリスト教団佐敷教会の牧師をされていた平良修さんが協力されました。

これらのことを踏まえて、ふり返ってみると、丸木夫妻の精神の遍歴が絵画から読みとれます。

悲惨な、言葉にできない空前絶後の原爆、その悲惨さ、警告なしに一般市民の上に投下された直後の「地獄」について、丸木夫妻は怒りと悲しみの思いで絵筆をとりました。

しかしその後、日本は被害者の立場であると同時に、日本もまた、加害者であったという認識をもつようになり、それ以降、その後の彼らの作品につながっていったのです。

日本は加害者であるという認識がもちにくかった。その背後には日本が優越なものであるという認識、民族中心主義、あるいはそれらによって他者をみようとし、他者を理解しようとし、偏狹な自己中心性が、国民にはありました。

沖縄に限って言っても、幼い子どもと年寄り沖縄戦当時、疎開をさせられ、それ以外の人は全島が日本軍の統制のもとにおかれ、協力させられ、そして日本軍は、彼ら住民を守つたのではなく、集団自決を強制したのであります。そのようなことを、平良牧師とお話をしたときに、「沖縄では、被害者の視点はあつても、加害者の視点に立つことは、なかなか難しい。沖縄の市民のなかでは、とても難しい」と言われました。そのとおりだと思います。同じように広島、長崎のみならず、東京大空襲など、終戦直前には日本のほとんどの町が空襲にあって、焼け野原になりました。一般の非戦闘員の上にも爆弾が落とされていたのですから、当然被害者という意識をもつでしょう。

しかし仏教徒である、キリスト教徒であるか否とも問わず、あるいは宗教を信じる、否とも問わず、人間の本来の「罪」の現実をみるがゆえに、あるいは目を開かれ、知らされたがゆえに、丸木夫妻は新しい生き方、精神的遍歴へと歩みだしたのです。彼らの精神の遍歴は、彼ら自身が新しい目を開かされる、新しい耳をもち始める、新しい心をもち始めるということだったと言えましょう。

先の戦争の時代の人命が、いくつ失われたかということ、中国では推定1000万人、韓国で20万人、多くの人はご存じありませんが、ベトナムで200万人、餓死です。インドネシアで200万人。餓死です。フィリピンで100万人、フィリピンがアメリカに近いということで、フィリピン人とみたら殺していたということでありました。そしてその期間、日本人は、330万人死んでいます。そのうちの非戦闘員、一般の市民110万人の命が奪われたと考えられています。この歴史に向き合うとき、声高に、簡単に平和と言えない思いがします。打ちのめされる思いがします。このとき、聖書が語る言葉は、心に突き刺さってきます。

加害者と被害者を越えて―平和

私たちにとって、これらのものに対する希望は希望ではない。現にみえているものに、誰が、何を望むのでしょうか。私たちは目にみえないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むべきなのです。これが実はアドベント、クリスマスを、イエス・キリストの誕生を待ち望むということなのです。神の意志がこの世に実現することを待ち望むことです。今年のクリスマス、とりわけ2011年は、日本にとって、東日本大震災、福島原子力発電事故と、連続して起こった悲惨な現実を受け止め、立ち向かっていかなければならない未曾有の年となりました。今年のクリスマスをどのように待ち望むのか。私たちは誰しも平和を望み、願います。キリスト教がいう平和は、ヘブライ語で挨拶にもなっていますが、「シャローム」と言います。

「シャローム」とは、「平和」と通常訳しますが、これは単に戦争がない、武器をとって武器で殺されるのではない、争いはないという消極的な意味においての平和という意味では

なく、神が人間に命じている平和ということです。神の正義がこの世で実現しているか、いないか。一人でも悲しむものがある社会は、平和ではない。一人も滅びることなく、失われることなく、互いに愛し合う世界が実現することを命じている、これが「シャローム」＝「平和」ということです。

私たちが生きているこの現実のなかで、神の意志とはなにか、思いを潜め、耳と心を澄ませて、クリスマスを迎えたいと願い、祈ります。

2011年12月7日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録